

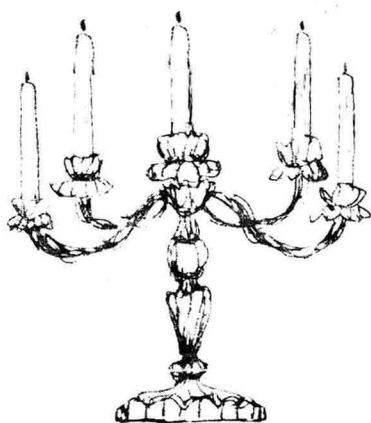
鏡子の家



鏡子の家

第二部

三島由紀夫



新潮社版

鏡子の家 第二部 價 290圓

著 者 三 島 由 紀 夫

昭和 34 年 9 月 16 日 印刷
昭和 34 年 9 月 20 日 發行

發行者 佐 藤 亮 一

發行所 株式會社 新 潮 社

〈印刷 大日本印刷・製本 大進堂製本〉

東京都新宿區久米町71 振替東京 808
電話047111~9

© by Yukio Mishima, 1959. Printed in Japan

鏡
子
の
家

第二部

第六章

喫茶店アカシヤは繁昌してゐた。收はあひかはらず只の客をたくさん連れて来て入りびたり、母親は收に過分の小遣をやつた。

「こんなにくれなくてもいいよ」と或るとき息子と言つた。「こつちにだつてちゃんと金蔓があるんだ」

「そんならたまにはお母さんに、美味しい晩ごはんぐらゐ奢つておくれ」

收は閉口して、母親を銀座の洋食屋へ連れて行つた。

身装こそ良くなつたが、化粧はますます毒々しい母親と、かうして五月の宵の口に、銀座の贅澤な食事を一緒にするのは、收にとつて不愉快なことではない。自分は外國へ行つたことがないが、佛蘭西の女郎屋のおかみといふのは、きつとうちのおふくろのやうなタイプにちがひないと收は想像する。母親は眞赤な爪をナイフに映してみて満足し、もつと深くナイフを覗き込んで前髪に加減を直した。

二人はいつもの通り色事の話をした。息子が一つすると、母親も一つする。母親の話は、どれも少しのところで男の魔手からのがれたといふ話ばかりである。もしかすると母親らしい羞恥心から、息子の前ではそれから先を話したがるらないのかもしれない。

さう收が思つてゐると、卓のむかふから、母親が彼の耳もとへ口を近づけてかう言つた。

「お前と私とはどうしても母子と思はれてゐないよ。むかふの席へ着いた奥さん連が、さも輕蔑する

やうな、それでゐて羨ましさうな目つきで私たちを見てゐた」

「思ふやつには思はしとけばいいのさ」

母親は息子の美貌をうつとりと眺めた。自分の名前だけの良人もかつては美貌だったが、こんなみづみづしさや逞しさはなかつた。秀でた眉の下に黒い瞳や、形のよい鼻や、男雛のやうな唇や、その春の服の肩から胸もとを充實して支へてゐる肉の厚みや、……しかしかういふもの一切が、すばしこい不斷の精力とは無縁で、展かれぬ窓のやうに内側に引き籠つてゐる感じだけが、父親と似通つてゐた。母親はその窓に外から鼻を押しつけて、仄暗い内部をもつとよく覗きたいと思ふのであつた。しかし内部には家具のたたずまひがかすかに見えるだけで、人氣ひとけはなく森閑としてゐた。

「お前はこのごろ役のつかないことをさつぱりこぼさなくなつたのね。劇作座にはずつと行つてゐるんだらう？」

「ああ」

母親はアントレエを待つあひだも、そそくさと煙草を喫んだ。煙に卷かれる卓上のスパートピーを面白さうに赤い爪先で摘つまんで、

「一流の店でも、こんな安花でごまかすんだからね」
と言つた。

それでも母子は何とはなしに幸福である。母親は自分が生れながらの富家の出で、仕立のいい服を着た息子と洋食を喰べてゐるといふ空想にとりつかれ、息子は息子で、いかがはしい商賣のおふくろを、女の紐になつた稼ぎで奢つてゐる無頼の孝行息子といふ風にわが身を想像してゐる。收は母子共、何か犯罪と紙一重のところゐて、今日一日の豪奢をたのしんでゐる、と想像することが嬉しいのである。

「それにしてもこのごろの金貸しは鷹揚だね」

「何故？」

「ちつとも利息をとりに来ないんだもの。税務署より鷹揚だね」

「こつちから持つてくんぢやないのか」

「誰が、ばかばかり、利息なんか持つて納めに行くもんかね。こつちがお客様なんだから、むかうから取りに来ればいいんだ。それに來月が期限なんだけど、もう二三ヶ月延ばしてもらふわ」

「利息は月いくら？」

「九分だから九萬圓だわね。それも最初の二ヶ月の利息は天引されてゐるんだよ。百萬圓借りても、その十八萬圓と、調査料とかを五萬圓とられて、手取は七十七萬圓しかなかつたんだから、人を莫迦にしてゐる」

「月九萬圓か。それぐらゐなら拂へるんだろ」

「當り前だよ。取りに来ればいつだつて拂つてやるわ。でも先月の分も、先々月の分も、あんまり取りに來ないから、なし崩しに遣つちまつたけどね」

「それが僕にくれる小遣のものとか」

「さうしたものでもないわよ」

と母親は不得要領に少し照れて言つた。收は何となく眞暗な未來を見た。むかしから洗ふ手間を億劫がつて、汚れ物をひとつにまとめて押入に放り込んでおくやうなこの母親と、自分との間には、本當に生活と呼ぶに足るものはなかつたのである。ひどく貧乏なときでさへ、その貧乏は空想的な要素を失はず、地道な貧乏から遠かつた。眞暗な未來は汚れ物の白っぽい堆積に埋まり、ひろがる闇は大きな潤んだ感傷的な星に充ちてゐた。……

收はデザートの氷菓の匙を急に懇めて言つた。

「大丈夫なのかな」

「何が」

「その借金さ」

「大丈夫だよ。私に任せておき。……それよりそんなことは忘れて、二人で映画でも見に行かうよ。店が忙しくつて、ずるぶん見ないんだから」

そこで收は、食後、母親の好きな日本映画の、ごく若い、外側へまくれたやうな唇をした剣戟俳優の演ずるチャンバラものを附合はされた。この若い時代劇俳優の顔を、あんまりたびたび、きれいだきれいだと言ふので、收は少なからず氣を悪くした。

——あくる日の夕方、收はふたたびアカシヤにゐた。鞠子の約束は常のごとく遅かつた。まだたつぷりと暇があつた。筋肉友達は皆ジムから忙しげに散らばつてしまひ、收は一人残されてゐるのである。

新劇きちがひの女客が、收にくれた外國の古雑誌がある。スカンデナヴィヤの國語で一字も讀めないが、舞臺寫眞が豊富に入つてゐる。その中に收はデニムのジン・パンツに、格子縞の半袖シャツの姿で、身を弓なりに、舞臺にのけぞつて、爪先立つてゐる金髪の若者の寫眞を見た。多分射たれたところであらう。片手が上方から注ぐ照明の光線の束をつかんでゐる。

收はそのポーズがあんまり美しいので、しばらく見惚れてゐた。舞臺上の悲劇的な瞬間から、彼はずるぶん永いこと離れてゐた。死も殺人も、舞臺の上では神祕な光線に莊嚴しやうごんされて、一つの祭儀のやうになるのであつた。射たれた若者の金髪は、おなじ色の光線の中に融け入つてゐた。そしてこのふ

しぎな瀕死の姿は、少しも苦痛の聯想を生むことなく、或るものに關はつた人間の精神の形が、最適の姿態をとらへて、この定着した一瞬のうちに、のびのびとくつろいで身を休めてゐるやうに見えるのであつた。

その「或るもの」とは何だらう。死だらうか。虚無だらうか。それとも危機だらうか。いづれにせよ、收には、精神が自分の内部で培はれて育つてゆくといふ考へは微塵もなかつた。精神はいつも瀕氣のやうに外部に漂つてゐて、何かの時に憑きもののつくやうに、舞臺上の俳優に襲ひかかつて、つかのまの人間の姿態を借りて發現するのであつた。

この射たれた金髪の若者は、あざやかな光線を浴びてのけぞつた一瞬の姿態が、正確に何を意味するかを知らない。それは目もまばゆいほど明確な存在ではあるが、精神が存在の中にのびのびと身を休めるこんな瞬間には、人間は存在することだけで一杯なのだ。舞臺の上にはこのやうな奇蹟がある。そして、悲しいかな、收は一度もその奇蹟をわがものにしたことがないのである。

——そのとき店に、一人の柄のわるい青年が入つて來た。髪はボマードで兜のやうに固められ、青いナイロンのジャンパーのポケットに、兩手の親指を引つかけるやうにしてゐる。レジスタアの女の子に何か訊いてゐる。女の子は、ちらと收のはうを見た。

店の奥の間へ通ずるベルが押されたとみえて、收の母親が出て來て青年の應對をすると、彼を案内して奥の間のはうへ戻らうとする。青年は太い金指環をはめた指で、ちびた煙草を口の角からつまみ取つて、すばやくあたりへ視線をめぐらしながら、床に踏んだ。

「何か用だつたら、僕も行かうか」

と思はず收は母親の背へ呼びかけた。

「いいんだよ。いいんだよ。そこにおいで」

母親はほとんど振向きもしないで言つた。その黒い四角いスーツの背中が、燐寸箱のやうに小さく纏つて見えた。

……收の待つ間は永かつた。何度か奥へ行かうとしてためらつた。

さうしてゐる間にも、彼には今日の平穩な生活の崩壊してゆく姿がまざまざと見えた。自分の無爲を支へてゐるものが、急に心許なく感じられだすと、知るかぎりの人、知るかぎりの物が寄つてたかつて、貴い玉座を支へるやうに、彼の無爲を支へてゐるのだといふ、理由のない確信もうつろになつた。

奥のドアから青年が出て来て、母親を見返つて、よくとほる聲でかう言つた。

「明日の五時だ。忘れちやいけねえぜ」

その威丈高な聲にお客は一せいにそのはうを見た。母親は店の入口まで送つて行きながら、

「あんまり大きな聲を出さないで下さいね」

男は返事もせずに出て行つた。

收が立上るより先に、母親が彼の耳もとへ来てから言つた。

「催促に來たんだよ。利息を三月分すぐ拂へと言ふの。あした出来るだけ拂ふからと言つて歸したんだけど」

「そんなに向ふの言ひなりになることはないぢやないか」と收は考へて、「それよりあれは本物の使ひなのかい？」問合せてみたはうがいいんぢやないか」

「ああ、いいところに氣がついた。さすがは男の智慧だね」

平氣さうな口は利いてゐるが、母親は明らかにおびえてゐた。奥へ切り換へるべき電話の受話器を、客の注視の只中で、レジスターのところで取り上げようとしたのである。

母親から金融業の社長の名前と、今の使ひの男の名をきいて、收は奥の電話をかけた。

「甲州商事さんですか。社長はをられますか」

しかし出て来たのは女の聲だつた。

「社長さんをおねがひしたいんですが」

「私、社長ですけど」

「秋田さんですか」

「私、秋田清美きよみです。どちら様です」

「舟木ですが、けふ小倉さんつて人が催促に見えたんですが、たしかにお宅の使ひの方でせうか」

「小倉？ ええ、うちの若い衆ですわ。たしかにさつきお宅へ伺はせましたよ。それで、あなた誰なの？ 舟木さんの息子さん？ 新劇をやつていらつしやるんですつてね」

收はすこし口籠くもつた。

「うちの若い衆が何か失禮なことでもしてたら、お母さんにお詫びしといて下さいね。ぢやあ、お母さんよろしく」

電話はそれで切れてしまつた。女の厚ぼつたい粘り氣のある聲は、耳にまだ沈澱してゐた。

「社長つて女なんだね」

「さうだよ。三十七、八つていふところだらうか。不器量だけれど氣分のいい人で、私は紹介のよかつたせゐもあるけれど、ブローカーを通じないで、ぢかに借りられたんだもの。それも半年といふ長い期限内で」

醜い女といふその言葉が、收の心にいろんなイメージを呼び起した。それは收が或る類型に入れて考へてゐるものの總稱であつた。この世から見捨てられて、醜さだけを金科玉條にして、醜さ以外の

どんな不幸をも輕蔑して、はては醜さを自分の神にしてしまつた修道女たち……。

「私はいつかきれいな別莊を持ちたいね」と母親がふいに言ひ出した。「白樺の林にかくまれて、白樺の枝で組んだ露臺があつて、私が廣間で友だちを集めてお酒を呑んでゐると、お前は自分の部屋で連れ込んだ女と寝てゐるのさ」

收はちらと鏡子の家を思ひうかべ、母親がもしそんな場面に登場したら、別莊は忽ち娼家になつてしまふだらうと想像して可笑しくなつた。

「そんなの、別莊を一夏借りりやあ、わけがないさ」

「いいえ、自分の持家ぢやなくつちやだめ。……さうして私は鸚鵡だの猿だのを飼ふだらう。猿にはピーナツをやるからいい。それはさうと、鸚鵡は何を喰べるんだらうね」

——翌日、收は母親を護るために、五時前から店に來てゐたが、五時にあらはれたきのふの男は、意外に大人しく、母親がくどくどと言譯をしたあげく、一月分ひときだけの九萬の利息を渡すと、黙つて歸つた。

それから二三日、收はアカシヤに寄りつかなかつた。下宿でぶらぶらしてゐたり、鞆子と例のごとく泊つたりしてゐた。現實はずつと遠くにあつて、目に見えなければ存在しないも同様だつた。五月の或る日は夏の光りを撒き散らした。收はジムの鏡の前に立つて、金いろに輝く裸體を眺めた。そして満足し、幸福になつた。

四日目の午後、外泊した收が下宿へかへると、母親がすぐ電話をくれといふ傳言を残してゐた。電話をかけた。母親は泣いてゐた。

店で話したくないといふので、收は母親を下宿へ呼び寄せて事情をきいた。彼女はきのふ、秋田清美社長のぢきぢきの訪問を受けたのであつた。愛想よく迎へ、一昨日支拂つた利息の話をした。

「利息？ そんなものはいただいてゐませんよ」

と社長は卽座に言つた。小倉がかへつてきて、そこばくの自動車賃をもらつたが、利息はとれなかつたと言ふので、今日改めて催促に來たのださうである。

母親は激昂して抗議をした。

「それほど仰言るなら、領收證を見せてください」

と秋田が言つた。母親は領收證をもらつてゐなかつた。

秋田が紙を出させて、目の前で算盤を弾いてみせて、母親の仕拂ふべき金額を示した。それは愕くべき額であつた。

三月目から五月目まで延滞利息がつぎつぎと累増してゐる。三月目がすぎて拂はれなかつた利息は、貸したものとして元本に加へられるので、次の月には百九萬圓の元本に九萬八千百圓の利息がつき、さらに次の月には百十八萬八千百圓になつた元本に、十萬六千九百二十九圓の利息がつく。かうして來月の満期に母親が支拂はなければならぬ金額は、百五十萬圓を優に超え、はじめうけとつた七十七萬圓の倍額に達するのである。

「だつて今まで御催促がなかつたから」

と母親は當然の申立をしたが、秋田は、ちゃんと契約に明記してあるのだから、利息は黙つてゐてもそちらから拂ふのが當然だ、と言ふのであつた。かうして母親は完全に窮地に陥つた。

「私たちには氣晴らしが要るね」

と話しをはつたとき、唐突に母親の言ひだした言葉が收をおどろかせた。彼女は何らかの彌縫策さへ講じようとしてゐなかつた。自分たち母子が追ひつめられてゐるといふ認識だけで十分で、それで凡ては語られてしまつたのである。

聞いてゐるあひだ何の名案の浮ばなかつた收も、母のこんな一言でやや氣が樂になつた。

暮れた初夏の空の一部が急に明るくなつた。後樂園のナイターの照明である。やがて風のまにまに、潮騒のやうな喚聲が窓邊に運ばれた。

「あの人たちは苦勞がなくなつていいね」

「莫迦だな。あんな大勢のお客が、みんな苦勞がないなんてことがあるものか」

收は劇場を、初夏の暮れ果てた空の下の大な劇場を夢みてゐた。その喚聲は、そこで現實に進行してゐる悲劇に對する喝采で、數萬人の觀衆の眼下には、さわやかな夜風に衣裳をなびかせてゐる俳優によつて、何か夢魔的な筋の芝居が演じられてをり、闇の中を光芒がつんざくところ、本當の殺人が行はれ、本當の血が流れるのである。もつともスタヂアムのでつぺんから眺めれば、倒れた人のまはりの血のひろがりも、絨毯の上にこぼれたインクの汚點^{しみ}ほどにししか見えはすまいが。……

「……そこでは毎晩刃傷沙汰が起り、悲劇が起り、本當の戀の鞘當、本當の情熱、——ええ、どんな俗惡な情熱でも、あなたがたの物知り顔よりは高級ですもの、——さういふ本當の情熱、本當の憎しみ、本當の涙、本當の血が流れなくちやいけませんの」

さういふ戸田織子の去年演じた芝居の臺詞が耳によみがへる。收は、風のまにまに遠ざかつたり近づいたりする喚聲と、異様に大きな月の出のやうに空の一角を輝やかせてゐる照明との只中に、もう一人の自分がゐて、數萬の證人に見成られながら、或る決然たる行爲をするところを想像する。存在を證明し證明される行爲、……一つの究極の行爲、……數萬の觀衆をして彼の存在を否定させること